

試験研究成果普及情報

部門	病虫害	対象	普及
課題名：輸出用イヌツゲ生産圃場におけるオオハリセンチュウ密度低減技術の開発			
〔要約〕 輸出用イヌツゲのオオハリセンチュウ対策として、圃場における夏期ベノミル水和剤灌注処理技術と輸出直前の根部浸漬処理を組み合わせることにより、慣行処理よりも、オオハリセンチュウ検出率が低下する。			
キーワード [※] イヌツゲ、輸出、オオハリセンチュウ、灌注処理			
実施機関名	主 査 農林総合研究センター 病理昆虫研究室 協力機関 農林総合研究センター 花植木研究室、海匠農業事務所、山武農業事務所、千葉県植木生産組合連合会輸出入部会		
実施期間	2012年度～2014年度		

〔目的及び背景〕

輸出用植木では検疫における植物寄生性線虫類の検出が問題となっている。既存手法である根鉢の薬剤浸漬処理では検出頭数の大幅な削減は可能であるが、検疫有害動植物であるオオハリセンチュウについては無検出が求められている。そこで、本種の検出率が高いイヌツゲにおいて生産期間中に処理可能な薬剤防除体系を構築し、既存手法と組み合わせることにより、検出リスクをさらに下げる技術の開発を行う。

〔成果内容〕

- 1 オオハリセンチュウは年1化と推察され、自然条件下においては5～6月にかけて孵化により密度が増加する（図1）。
- 2 イヌツゲにおいてベノミル水和剤（緑化用ベンレート水和剤）500倍液を10L/m²株元灌注処理し、処理後に100L/m²程度灌水をすることにより、オオハリセンチュウ密度低減効果が得られる。株元灌注処理の時期は、卵が孵化した後の夏期（6月～7月）が望ましく、半年程度は低密度が維持される（図2）。
- 3 イヌツゲ輸出前の防除体系として、圃場における夏期ベノミル水和剤灌注処理と輸出直前（冬期）の根部浸漬処理を組み合わせることにより、慣行処理と比較して処理後の検出率が低下する（図3、表1）。

〔留意事項〕

〔普及対象地域〕

県内輸出用植木栽培者

[行政上の措置]

[普及状況]

[成果の概要]

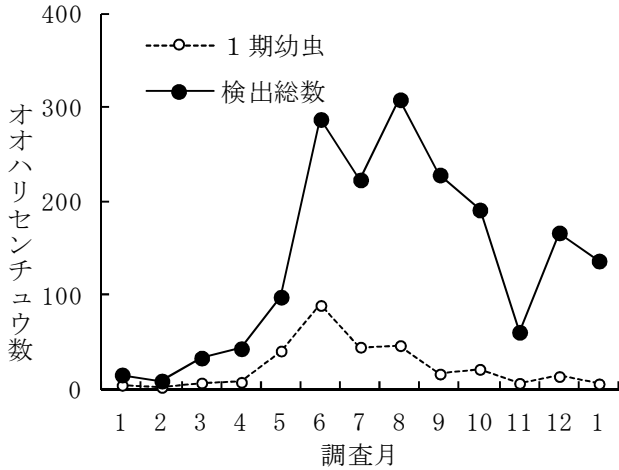


図1 イヌツゲにおけるオオハリセンチュウ密度の推移
 注) 根域土壌100g当たりからシービングベルマン法により分離した頭数の平均値

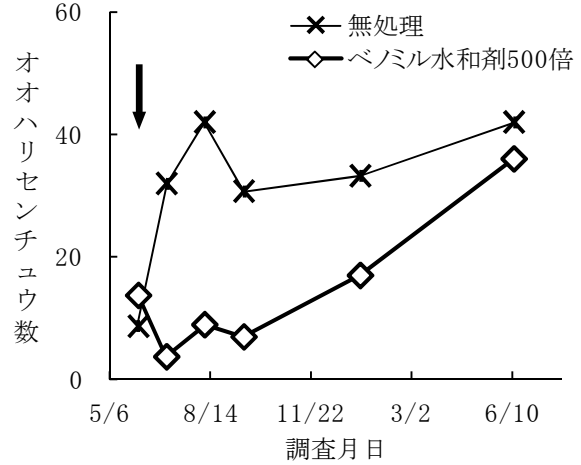


図2 夏期圃場灌注処理前後におけるオオハリセンチュウ密度の推移
 注1) 根域土壌100g当たりからシービングベルマン法により分離した頭数の平均値
 2) ベノミル水和剤500倍は薬液10L/m²株元灌注処理後に100L/m²相当の灌水を行った
 3) 図中の矢印は薬剤処理時期を示す

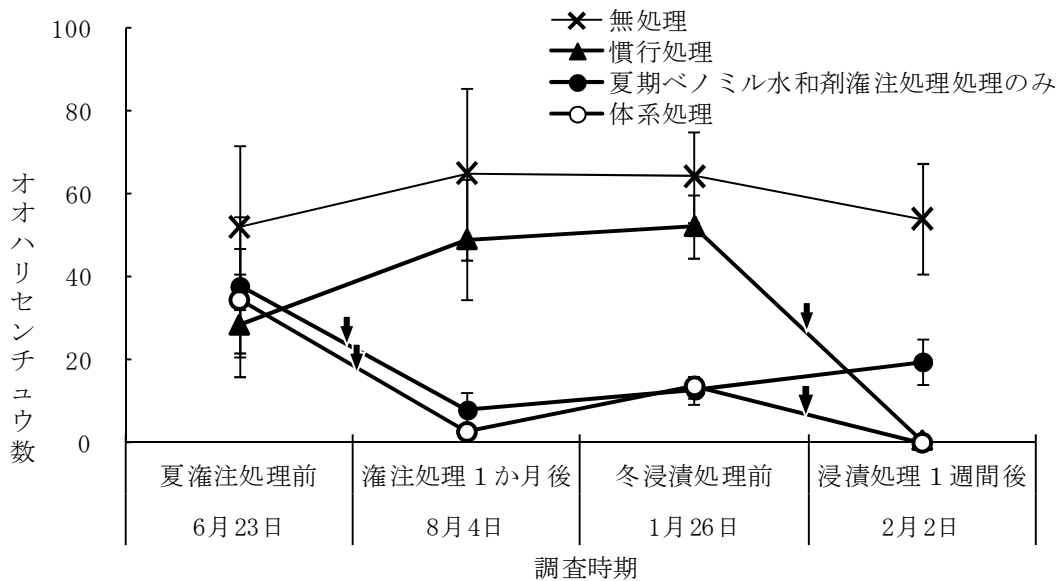


図3 体系処理前後におけるオオハリセンチュウ密度の推移
 注1) 根域土壌100g当たりからシービングベルマン法により分離した頭数の平均値
 2) 夏期ベノミル水和剤灌注処理：500倍液10L/m²株元灌注後に100L/m²相当の灌水、慣行処理：冬期MEP乳剤80（スミバイン乳剤）の500倍液30分間根部浸漬処理、体系処理：夏期ベノミル水和剤灌注処理と冬期根部浸漬処理の両方を処理
 3) 図中の矢印は薬剤処理時期を示す

表1 体系処理と浸漬処理のみの場合の浸漬処理後のオオハリセンチュウ検出頭数

防除方法	10本調査時の検出数									
体系処理	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
浸漬処理のみ	0	2	0	1	0	4	2	2	1	0

[発表及び関連文献]

- 1 武田藍・加藤正広、輸出用植木の生育中薬剤灌注処理によるオオハリセンチュウ密度低減効果（講要）、日本線虫学会誌、第44号、2014年
- 2 平成27年度試験研究成果発表会（花植木部門）

[その他]

平成24年度試験研究要望課題（提起機関：海匠農業事務所）